

常 磐 炭 田

ハア—ア 朝もはよからヨオ カンテラさげてナイ
坑内通いもヨオ ドント主のためナイ

いわき地方といえば、かつては日本産業のエネルギー源となった石炭の産地、常磐炭田が思い出されます。

常磐炭田は、北は双葉郡富岡付近から、南は茨城県日立市付近まで、南北90Km 東西は5～25 Kmの地域です。ここでの石炭は、新生代古第三紀の砂岩層や頁岩層にはさまれて、阿武隈山地の東縁に露出しており、地層は東側に傾斜して、産地を越し太平洋の大陸棚までのびております。

江戸時代末期に発見され、明治から昭和にかけて採炭され、戦後の日本再建の一翼を担っていました。昭和24～25年の最盛期には、およそ120余の炭鉱が稼働し出炭量は400万トンを越し、九州、北海道に次ぐ大きな炭田でしたが、石炭から石油へのエネルギーの変遷で斜陽化し、次々と閉山してしまい、ズリ山だけが淋しく各地に見られます。

常磐炭田の確定炭量は、4億トンといわれ、年産400万トン出炭したとして、100年の寿命があり、大陸棚に眠る海底炭田を含めると、埋蔵量は、さらに倍加されるといわれています。